

氏名(本籍)	<small>なか だ もと こ</small> 中 田 元 子 (茨城県)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 乙 第 2409 号
学位授与年月日	平成 20 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	<small>ウエット ナース</small> 乳 母をめぐる言説と表象 - 19 世紀イギリス社会に関する一考察 -
主 査	筑波大学教授 Ph. D. (文学) 竹 谷 悦 子
副 査	筑波大学教授 博士 (文学) 江 藤 秀 一
副 査	筑波大学准教授 博士 (文学) 山 口 恵 里 子
副 査	関東学院大学教授 博士 (文学) 仙 葉 豊

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、報酬と引き換えに他人の赤子を授乳し育てる十九世紀イギリスの乳母 (wet nurse) を研究テーマとして取り上げ、丹念な資料収集と読解をもとに、その実態を解き明かすものである。また乳母をめぐる医学的言説の形成ならびに文学作品における乳母の表象の分析をとおして、ヴィクトリア朝のドメスティック・イデオロギー、資本主義、セクシュアリティなどの問題を多角的に論じている。

第 1 章「母性愛のあらわれとしての母乳哺育」では、かつて動物に等しい卑しい行為とみなされた授乳が、上流階級においてファッションとして再定位され、さらには中産階級の台頭とともに規範化されていった歴史のプロセスを探る。授乳を母性愛のあらわれとして理想化する医学の言説のもとで、中産階級の女性が実際に行なった授乳の実践と意味付けを、日記、手紙、伝記などの史料から考察し、また下層階級の母親の声を女性協同組合ギルドが収集した証言集『母性 -- 労働者階級女性からの手紙』から丹念に拾い上げる。

第 2 章「手で育てること -- 人工哺育の危険性と権威」では、母乳哺育と対置される人工哺育の誕生とその推移を、当時の医学書や手引書などの第一次資料分析を中心に再構築する。母乳哺育の規範化、さらには人工哺育の危険性にもかかわらず、人工哺育が一方で浸透していった現象を、乳母雇用をめぐる社会的文脈のなかで解明する。労働者階級の母親が必然的に人工哺育に頼らざるを得なかった一方で、富裕階級は乳母への不信から人工哺育を試みたと著者は示唆する。そして危険な人工哺育を (医者に代わり) 統御する女性の「手」の権威を、ディケンズの『大いなる遺産』とエミリ・ブロンテの『嵐が丘』のなかに読み解いていく。

第 3 章「乳母という必要悪」では、母乳哺育 / 人工哺育の二極の狭間でさまざまな社会的意味付けの対象となった乳母雇用の慣習を、1850-60 年代にかけて起きた「乳母論争」を切り口として考察する。十八世紀には富裕階級において「当然」の慣習としてみなされていた乳母雇用が十九世紀に「問題」として処理されるようになってきたのはなぜか。本章では、乳母の授乳による「気質の伝染」「感情の影響」「梅毒感染」さらには「未婚の乳母」問題の分析に加え、階級間の截然たる分断ならびに乳母雇用形態の変化により、「乳母の子」が支払わなければならなかった死の代償とその隠蔽・黙認の歴史をあぶりだす。

第 4 章「『タイムズ』の求人・求職広告にみる乳母雇用の実態」では、乳母たちが記録に残した唯一の言

葉と言え新聞の求職広告を手がかりにして、国勢調査には表れない乳母雇用の盛衰を推定し、また歴史に埋もれた彼女らの声なき声への接近を試みる。求職広告数のデータから著者は、十九世紀の乳母需要の最盛期を1856年から1861年であると推定する。また頻出する広告文句から社会が重要視した乳母の条件を探る一方、(一見自己撞着である)「リスペクタブルな未婚の乳母」という諷刺文句の分析をとおして、未婚の乳母が体面を重んじる中産階級の家庭に入り込んでいくことを可能にした社会のメカニズムを解明する。

第5章「ディケンズ『ドンビー父子』の乳母」では、乳母雇用をめぐる、医学書に示された規範に忠実に従う女性登場人物たちと男性主人公とのあいだの関心のずれに着目し、伝統的な中産階級のレトリック(母性愛に基づいた情緒的行為としての授乳)と乳母雇用が依って立つ資本主義言説との交渉の軌跡をテキストのなかに跡づける。『ドンビー父子』の乳母に関する記述は、社会史の史料ともなりうるほどに現実的に描かれる一方、作中主人公は、乳母(労働者階級)による授乳行為を脅威--階級の潜在的境界侵犯--と捉える。著者によれば、ドンビーによるこの乳母嫌悪は、乳母を徹底して流通する商品とみなすイギリス社会の資本主義言説に接続することで解消が試みられているという。また『ドンビー父子』における「乳母の子」の問題の回避は、乳母雇用という社会悪に加担した中産階級の一員としての作家ディケンズの居心地の悪さが反映したものであると、著者は示唆する。

第6章「『エスター・ウォーターズ』とリスペクタブルな未婚の母」では、イギリス文学史上初めて乳母を主人公にしたジョージ・ムアの小説と、その小説に登場する未婚の乳母に焦点をあて、中産階級のアイデンティティの重要な構成要素--リスペクタビリティ--を、労働者階級の主人公が「リスペクタブルな(乳)母」となることで占有していく過程を分析する。著者によれば、『エスター・ウォーターズ』では、家父長制度の規範から逸脱した未婚の母が、家父長制度の内部にのみ存在するはずの「(慈しみ育てる)理想の母」として描かれ、それを通じて逆説的に、乳母雇用階級である中産階級の「常識」の恣意性と「乳母の子」の生死をめぐる問題を明らかにしている。さらに後年の小説の戯曲化においては、批判の矛先が保育施設「ベビー・ファーム」の劣悪な環境をめぐる問題へと移行していることに注目し、労働者階級の母親(乳母)とその子をめぐる認識の変化を指摘する。

終章「乳母の復活」では、母乳代替物と人工哺乳器具の発達によっていったん淘汰された労働者階級としての乳母が、二十一世紀の現代の先進国で復活しているという事象をもとに、乳母をめぐる問題の現代性を説く。さらに現代における金銭授受を伴わない相互扶助の性格を持つ母乳の共有(もらい乳)現象を論じ、代理授乳が未来の母子関係や女性をめぐる家庭と社会の意味付けを変革する可能性をもつものであると示唆する。

本論文は、以上のように、十九世紀イギリスの乳母を多層的な問題系から検討するという作業を通じて、「自然」な関係であるとみなされがちな母子関係ならびに授乳という行為について、その隠された歴史性、イデオロギー性を解明する。そしてそのことにより、現代の母子をめぐる思考パターンの相対化を図っている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、乳母という近代社会における「不可解な存在」について、イギリスにおける母乳哺育の流行と規範化、さらには人工哺育の発達という歴史の文脈のなかで詳細に記述し、その全容を明らかにすることを試みる画期的な論文である。従来の女性史や労働史の射程から取りこぼされていた乳母という存在を忘却のなかから再生させ、さらにその作業を通じてヴィクトリア時代の階級制度、資本主義、ドメスティック・イデオロギーのメカニズムをも逆照射するダイナミックな研究になっている。

授乳行為は、一見普遍的でありながら、イデオロギー性を帯びた文化的営為であることを看破する本論文は、極めて先駆的な意義をもつ研究となっている。イギリス社会では十八世紀末から十九世紀初めにかけて

授乳方法が革新的に変化しているが、それは単に方法の変化を意味するのではなく、母親像や母子関係をめぐるパラダイム・シフトのなかで生起していたことを本論文は初めて検証した。さらにそのパラダイム・シフトが中産階級の台頭により可能となった事実のみならず、中産階級のかかげる「理想の母親像」が母乳哺育という習慣を伴って、約五十年という短期間のあいだに、上流／下層階層へと浸透していったことを明らかにした。

また、本論文はその論旨が極めて明快であるにもかかわらず、複層的な問題系を横断することで質の高い議論を展開している。とりわけ、身体の一部である乳房ならびに有機的な滋養物である母乳が母性愛の表出として位置づけられていった時代に、乳母雇用をとおして乳（房）が金銭的価値を伴う商品としてイギリスの資本主義経済に回収されていったことを解明していく箇所は圧巻と言えるだろう。本論文は(母親による)母乳哺育、(ヤギなどの乳を用いた)人工哺育、(労働者階級の)乳母雇用を詳細に論じているが、授乳という営為に内包される境界性(動物／人間、母性／金銭、家庭／労働)を実証的に解明しえた点も、本論文の特記されるべき成果である。

本論文は、近年の文化研究、フェミニズム批評、文学研究の手法を学際的に援用しつつ、多様なテキストを縦横無尽に横断し、十九世紀イギリスの乳母をめぐる新たな文化史を構築している。こうした革新的な方法論もまた高く評価されるべきである。多くの場合識字能力をもたなかった乳母たちの声なき声を再現するという難題に挑戦し、乳母たちが掲載した求職広告を徹底的に洗い直し分析するというアプローチにより目覚ましい成果を挙げている点は、とりわけ高い評価に値する。

その研究の画期的な意義から刊行が待たれる論文であるが、今後に向けて残された課題がないわけではない。本論文のなかで今回論じられることがなかった二点…乳母雇用がドメスティック・イデオロギーの(再)編成に与えた影響、ならびに「未婚の乳母」雇用が労働者階級に遡及的に与えた影響--については今後考察の余地があるだろう。また、中産階級の台頭が、母親像の変化をもたらした原動力として結論づけられているが、それ以外の要因の可能性についても検討する余地があるだろう。しかしこれらは、本論文の高い学術的価値ゆえに期待される今後の課題である。

よって、著者は博士(文学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。